

海は広いな大きいな

「海は広いな大きいな、行ってみたいなよその国」は童謡の出だしと終わりです。疎開で幼稚園と小学校を千葉の保田で過ごした私は、1年中、海が遊び場でした。海を見ながら、この歌は私の実感でした。

70歳で仕事を終え、毎日、茅ヶ崎の海を家内と散歩しています。浅瀬で水遊びをする人がいます。板に腹ばいになって波に乗る人がいます。遠くでは板に立ってサーフィンをする人がいます。その外側では、ウインドサーフィンで早く走る人がいます。

膝の靭帯を切っている私は海に入ることさえできなくなり、ただ海を眺めるだけになりました。それでも海を見ているだけで心が和みます。先の童謡は今もって私の実感でありつづけています。

ヨットの訓練

そのような時にハンザクラスのヨットを知りました。障害者でも老人でもヨットを操船できるということです。体重移動などせずに座っているだけで帆と舵の操作ができるということです。信じられませんでした。

運よく江ノ島のハンザクラス・ヨットの活動団体に入会できました。最初の1年は操船技術だけでなく準備・後始末の基礎を学びました。

真冬の練習がありました。ヨットの名門で、大学4年間、1年に170日間海に出たベテランから訓練を受けるチャンスがありました。軟弱な私は、体育会系のカルチャーにおびえながら、お荷物になったらいつでも辞めようと覚悟していましたので、「体育会系は誤解されている。本当はそうではない」と言われて半ば安心し、一生懸命楽しく訓練に励みました。

春が近づいた頃、「へんな風だな」と思った瞬間、「リーフして（帆を縮める）直ちに戻れ」という大声が海上に流れました。間もなく強風が吹き荒れ、操船は困難をきわめました。なんとか無事にハーバーに戻ることができました。

この数分間に私は大きなことを学びました。まず、海は怖いという実感です。今までは、海のやさしくおだやかな面だけを見ていたのです。次に、いちばん危険な場面で咄嗟にリーフができたという事はヨットの仕組みが頭に刻まれていることを意味し、自信を持ちました。さらに、操船困難な強風下でハーバーに戻れて操船にも多少の自信が生まれました。

海上に流れた大声は、私が恐れていた体育会系の大声ではありませんでした。皆を安全に導く適切な判断の下に出された大声でした。体育会系の情緒不安定で不愉快な怒声ではありませんでした。

た。

広がる人の輪

国内でハンザ活動をしている幾つかのグループがあり、親睦のレガッタが開催された折、江ノ島からの参加がありませんでした。心配した女性リーダーから私に参加するよう強い指示がありました。

私は女房を連れて広島に向かいました。1日目のレースの後の懇親会をさぼり街に出ましたが、江ノ島からの参加者が行方不明と主催者は心配し、江ノ島の面々に問い合わせる始末でした。海の藻屑はお好み焼きを食っていたのでした。

ヨット仲間には強い仲間意識があることに軟弱な都会人は気づきました。その後は各地の親睦レガッタに参加し、懇親会をさぼることはありません。フォーマルなレガッタではなく、奄美大島の仲間の家に皆で押しかけ、堪能した美しい南の海は私の心の奥底に沈殿し、写真などなくても、時々、浮かび上がってきます。

レガッタの海上で遭遇する好敵手もさまざまです。中学生の女の子にはいつも敵いません。そのお母さんは小学生の子供と一緒に乗っけるので、軽くて敵いません。何時も一緒にやっている車椅子の友人にも長距離レースで大差をつけられました。波が高く風の強いレースでは英国人の友人があっという間に視界から消えてゆきました。

パラリンピック強化選手の練習お膳立てをして並走しました。国際大会に出てゆく人材を相手に、精一杯やりながらも、ヨット文化の歴史の浅さを痛切に感じ、欧米だったら練習環境がけた違いに恵まれているであろうとかわいそうでした。

ヨット仲間の1人は老成した落語家が主催する落語研究会にも足を突っ込んでいます。下町育ちの彼は、古典芸能鑑賞と称して、落語、講談、歌舞伎、浪曲、大衆演劇などに私を誘ってくれます。ヨットの縁で、私の涙腺はまだ正常に機能しています。

行ってみたいよその国

ハンザ艇の生みの国オーストラリアで日豪親善レガッタがこの11月に開催されます。いつも顔を合わせている国内のヨット仲間が35人近く参加するそうです。私と女房もエントリーしました。参加することに意義があると割り切っています。11月を目指して1年がかりで練習している人もいます。

小学生が海を見て描いた夢が人生の名残りのような時になって実現しようとしています。